

いくつもの「幸運」を糧にして

浅野 邦彦
(浅野運輸倉庫株式会社)
代表取締役社長



昨年、創業75年を迎えた4月に「第8号倉庫」が竣工して10ヶ月、お陰様で満杯になったことは幸せの限りです。遡れば、創業70年の節目に「第6号倉庫」のスクラップ&ビルドを終えて間もない頃でした。隣接する地続きの土地を買わないかと持ち掛けられ、「二度と手に入らない土地」との思いから購入した矢先に、新型コロナウイルスの猛威が世の中を襲いました。土地の造成では文化財が発掘され、縄文時代の住居跡に悠久の時を経て令和の建物が覆う巡りとなり、工期よりも完成度を優先させたことで3年にわたる歳月を要しましたが、前回は上回る融資条件の提示と金融政策の延長が財務体質の強化につながり、地域社会における存在感の高まりはもちろん、社員の高揚と一段の成長を実感することとなりました。また、エッセンシャル・サービスとして「社会の安定に寄与」する使命から、厳しい管理体制のもとで事業を継続し、増床の効果もあり安定した業績が取められたことも、報われた思いでいっぱいです。いまだ先の見えない状況ではありますが、世界規模で経済活動が再開され、国内製造業もコロナ前の業績を上回る状況になりつつあることは喜ばしいことです。

滋賀県は国土軸の真ん中に位置し、古くは東海道と中山道の分岐点として、また、「近江を制する者は天下を制す」とまで言われた交通の要衝であり、社会構造が変化する中でもその重要度は増すばかりです。弊社は琵琶湖の南部に位置する栗東市で、倉庫業・運送業・通関業を営んでいます。新倉庫が加わったことで敷地面積が6万平方メートル強に達し、普通倉庫面積も県内一の6万平方メートルを超える規模となり、「ようやく夢が叶った」と古参社員は言いました。滋賀県倉庫協会、滋賀県食糧保管協会、日本関税協会滋賀保税会の会長会社として、地域社会に総合物流機能を提供しております。ちなみに滋賀県倉庫協会は現在83社、所管面積100万平方メートルを超える地方協会とし拡大を続けており、滋賀県トラック協会とも連携しながら、「滋賀のモノづくりを支える地域拠点型共同配送スキーム」を立ち上げています。

さて、今年の手始めは「新拠点始動」としました。年初めに発表会を行っており、全社員が決意を表明する神聖な伝統行事です。新拠点とは、この地に一大倉庫群が完成、AEO（認

定事業者) 制度の認定取得による国際物流機能の強化、DX (デジタルトランスフォーメーション) 対応のための環境整備、平均年齢35歳の会社が見据える「働き方改革」の実践など、立地条件、収容能力、顧客創造、デジタル対応、労働力確保等、持続可能な「内陸国際デジタル物流拠点」が動き出すということです。

物流業界は深刻な人手不足に陥っていますが、コロナ禍による“人材の流動化”により変化が窺えます。毎年新卒採用を続けていても人員確保に苦勞し、求人募集もままならない状況でした。ましてや高度人材採用など他人事でしたが、「物流」が注目されるようになり、他産業から若手の応募が増えて、ようやく計画人員に達したところです。そして、思ってもみなかった縁からシステムエンジニアを獲得したことで、一気に層の厚みが増しました。サプライチェーンが物流なしでは語れない時代となり、DXの対応・推進が可能な物流事業者は貴重、かつ、重要な鍵を握る存在になることは必至であり、更なる人材の育成につなげていく所存です。

身体に例えると運送は血管、倉庫は心臓だといわれ、拠点機能を担う倉庫は親事業者として、また、縁の下の力持ち的存在からプラットフォームとして、取引先を含めた全体での付加価値向上に取り組みなければなりません。

虎は「決断と才知」の象徴、^{みずのえとら}「壬寅」は新しい成長の礎とされます。昨年60歳還暦を迎えました。新型コロナウイルスは「20年時代を早めた」と言われます。「六十にして耳順う」。実は、今期で社長を交代しようと思います。利害関係者からも異論が出ないことは、判断が間違っていない証左と喜んでいます。別にいなくなる訳ではなく、業界団体の仕事は当面こちらが担い、会社経営の最高責任を持つことを明確にするだけです。既に日常業務は全て任せているので、自分がそうだったように、社長にならなければ社長はできないし、社長にしてやらなければ、いつまでたっても社長ではありません。

事業継承は中小企業の最重要課題であり、先輩諸氏からは「早過ぎる」と揶揄されますが、幸いに後継者と支える周りも育ってきており、あと5年くらいはそれなりに社長を続けられますが、長男はもとより、彼らが送る時間は全く違うものになると確信します。単なる5年と、10年以上にも匹敵する貴重な実践は取り戻すことはできないし、会社の成長、貢献度を考えても、また、時代の転換期であり、デジタル社会 (デジタルネイティブ世代) への対応ひとつにしても、足元にも及ばないのは歴然です。

思ってもみなかった原稿依頼のお蔭で、二つの倉庫の新設を手掛けられたこと、大きな節目を自らがつけられたこと、創業100年への軌跡を描けたこと、そして、なによりも“家業のありがたみ”をかみしめられた、この上もない機会をいただきました。創業者の祖父、中興の祖である父、「三代目は潰れる」のジンクスを嫌い二代目半と称する私、歴史的転換期に出立する息子たち、そして、未来に続く孫たちに感謝とエールを送ります。